

—編集後記—

皆様、第143号はいかがでしたか？ 私は、今回掲載された記事の原稿チェックをした関係で、編集後記を担当することになりました。どうぞよろしくお願いたします。土壌の物理性第136号の巻頭言で、石黒宗秀先生が、「土と内臓」(築地書館)という書籍を紹介されていました。気になって読んでみたところ、とても面白い！ と思いましたので、私なりにこの本を読んで考えたことを書いてみようと思います。

タイトルにある内臓とは、私たちにとってのいわゆる内臓であり、特に大腸を指しています。そして、この本では、もう一つ、植物の根という意味でも使われています。大腸とその内側の空間(内腔と呼ばれます)をひっくり返したものは、根と根圏にそっくりであるということが指摘され、その空間における人または植物と微生物の健全な共生関係が、人または植物の健康において重要であると著者は主張しています。この本は、生命を、一つの独立したものとしてではなく、複数の生物が相互に作用しあう生態系であると見ています。

さて、読んで驚いたことには、この本の中には土壌物理学という単語が出てくるのです。日本語訳では次のように書かれています。「土壌生態学は、土壌物理学や土壌化学のようなはるかに確立された分野に比べると、まだ幼年期にある。」私は、科学読み物の中で、今

まで土壌物理学という単語に出会ったことがなかったので、ちょっと嬉しくなっていました。

この一文に対する印象は人それぞれだと思います。私自身は、土壌生態学をまったく知りませんが、生命の多様さや複雑さを考えると、土壌生態学の未知なる領域が広大であることはなんとなく分かるなと思いました。また、土壌物理学が、ダルシー則や流体力学の考え方を理論の土台にしていることや、条件を整えられる室内実験を得意としていることなどを考えると、確立されている部分はある、といえそうです。

最終的に気になったのは、土壌生態学と土壌物理学の関係はどうなっているのだろうか、というものでした。例えば、土壌微生物と植物の共生関係が、土壌の物理性とどう関係しているのか、私は説明できません。そもそも、これは重要な問いなのか分かりません。しかし、例えば人の健康は、血圧や心電図といったいろいろな測定値から判断されます。同じように、土壌生態系のバイタルサインを土壌物理学は提供できるのでしょうか？ この問いを追求するためには、私たちは、確立されていると言われた土壌物理学を、根圏、つまり生命という視点で見る領域にまで適用する必要があります。そうです。

深田耕太郎(編集委員)

土壌物理学会

事務局構成	会 長	足立 泰久	筑波大学 生命環境系	
	副 会 長	小林 政広	森林研究・整備機構 森林総合研究所	
	事務局長	山下 祐司	筑波大学 生命環境系	
	庶務幹事	小島 悠揮	岐阜大学 工学部	
	編集幹事	朝田 景	農研機構 農業環境変動研究センター	
	会計幹事	西脇 淳子	茨城大学 農学部	
	会計監査	吉川 省子	農研機構 農業環境変動研究センター	
	編集委員会	委 員 長 委 員	岩田 幸良	農研機構 農村工学研究部門
			江口 定夫	農研機構 農業環境変動研究センター
			赤羽 幾子	農研機構 農業環境変動研究センター
飯山 一平			宇都宮大学 農学部	
片柳 薫子			農研機構 農業環境変動研究センター	
久保田富次郎			農研機構 農村工学研究部門	
小林 幹佳			筑波大学大学院 生命環境科学研究科	
佐野 修司			(地独) 大阪府立環境農林水産総合研究所	
鈴木 克拓			農研機構 中央農業研究センター(北陸研究拠点)	
高橋 智紀			農研機構 東北農業研究センター(大仙研究拠点)	
釣田 竜也			森林研究・整備機構 森林総合研究所	
常田 岳志			農研機構 農業環境変動研究センター	
橋本 洋平			東京農工大学大学院 農学研究院	
深田 耕太郎	島根大学 生物資源科学部			
淵山 律子	農研機構 九州沖縄農業研究センター			
百瀬 年彦	石川県立大学 生物資源環境学部			
渡辺 晋生	三重大学大学院 生物資源学研究科			